



ぼくの考えはみんなと違うよ

みんなが同じことを考えていたときです。突然、陽一さんが「僕の考えはみんなと違うんです」といいました。先生は「もっとよく考えなさい」といって取りついでくれませんでした。教師は陽一さんにどのようにリアクションしたらよかったですでしょうか。

あるひとつの正解を求める風潮があります。また、だれにも同じことを要求する傾向もあります。前者は「正解主義」、後者は「同調圧力」といわれています。こうした傾向は、これまで「個に応じた指導」や「個性重視の教育」を重視してきた学校教育においても、残念ながらいまなおみられます。

このような世の中の風潮を踏まえると、陽一さんが「僕の考えはみんなと違うんです」と発言したことはとても立派なことです。陽一さんに勇気があったことはもちろんのこと、自立して学んでいる証しでもあります。

ここでは「どこがどのように違うのか」を説明させ、陽一さんに出番をつくります。説明する内容は、ほかの子どもたちにとって違った捉え方や考えを学ぶ機会になります。今日、教育課題になっている多様性を認め合う学習集団をつくることにつながります。

合わせて、「違いだけですか。みんなと同じ考えはないのですか」と問い返すことも必要でしょう。異同（相違点）は物事を捉える重要な視点です。



教育の動向

教員採用選考の早期化問題

文部科学省では、優秀な人材が内定の早い民間企業に流れていることや、教員の採用倍率が低下していることなどを受けて、教員採用試験の早期化を検討しています。具体的には、大学4年の5月に1次試験、7月に2次試験を実施し、8月に合格発表するという地方公務員試験を目安にした方法と、大学4年の4月に1次試験、6～7月に2次試験を実施して、7～8月に合格発表するという国家公務員試験を目安にした方法が提案されています。いずれも、これまでより1～3か月前倒しして実施されることになります。

これに伴って、次のような課題が出てきます。まず教育実習の時期です。大学3年の後期（秋期）に早めて実施されることが想定されます。実習生の教育や教師に対する意識や意欲にも違いが出てくることが考えられます。実習生を受け入れる学校は、指導体制の見なおしが求められるでしょう。

次は、採用試験問題の作成を前年度の秋ごろから始めなければならないという課題です。試験を実施する都道府県等の教育委員会の問題作成体制を抜本から変える必要が出てきます。

文科省は5月を目処に方針を示し、令和6年度から実施したいとしています。採用試験の前倒しが優秀な教員の確保につながるのか。新しい制度の実効性が試されることになります。

北俊夫の「実践と研究」の足あと

教材の監修・作成に従事

各種の機関や団体から、教材の監修や作成の依頼が舞い込んできました。その依頼先は、環境、消費者、金融、国際協力、資源・エネルギー、稲作、酪農、工業、運輸、国土保全などさまざまな分野にわたっていました。

制作に関わった教材に、「わたしたちのまちづくり」（財務省主税局）や「世界みんなの笑顔のために」（外務省経済協力局）、「砂防副読本ふるさと安全たんけんたい」（砂防広報センター）、「調べてみよう！ レンズ付フィルム工場の秘密」（富士写真フィルム株式会社）、「農業とわたしたちの暮らし」（JAバンク）、「『国連・持続可能な開発のための教育の10年』用教材 Kids X Change」（ユネスコ）、「金融・経済教育教材」（しんきん保証基金）などがあります。中学校の社会科地理的分野で活用するDVD教材に、「世界と地域間を結ぶ交通とそれを支える人たち」（日本航空）もありました。

これらの多くは冊子の教材です。その後、学習効果を高めるため、ビデオやDVDなど映像教材が増えてきました。各学校で有効に活用できるよう、学習指導案やワークシートを示した教師用の指導手引きをパッケージにしたものも多くなってきました。

教材の作成に当たって苦労したことは、クライアント（スポンサー）の意向と学校の実態や学習指導要領の趣旨をいかに合体させるかということでした。宣伝色が全面に出たり広報的な意味あいが強くなったりすると、使われなくなる心配があったからです。教材は希望する学校に無料で配布されました。

令和2年度から実施されている学習指導要領では、日々の教育活動や授業を「カリキュラム・マネジメント」の視点に立って展開することを求めています。本題に入る前に、「カリキュラム・マネジメントとは何か」について整理しておきます。

ばんけい

教育ほっとにゅーず

かわら版

教育の小径 No.174

2023 April

4月号



(一財)総合初等教育研究所参与

北俊夫先生



今月のことば

百花繚乱

数多くの花が一斉に美しく咲き乱れることから、優れた人物や業績などが同じ時期に数多く現れることをいいます。「百」は多数を表します。

教科等横断的な指導の視点

- カリキュラム・マネジメントの一つは、教科等横断的な視点で教育内容を組み立て指導することです。子どもたちに社会を生き抜く力を身につけさせるためです。
- 教科等横断的な指導は、学習内容や教材に共通性のある課題を取り上げるときや、他の教科で身につけた学習成果を生かして学びを深める際に効果を発揮します。

カリキュラム・マネジメントとは

令和2年度から実施されている学習指導要領では、日々の教育活動や授業を「カリキュラム・マネジメント」の視点に立って展開することを求めています。本題に入る前に、「カリキュラム・マネジメントとは何か」について整理しておきます。

まず、「カリキュラム」についてです。カリキュラムはさまざまな定義の仕方がありますが、一般に「教育課程」と訳されています。教育課程とは、各学校が設定した教育目標を実現するために編成・実施される教育内容全体の計画（教育計画）のことです。

現在の教育課程は、10の教科、特別の教科 道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、それに特別活動から構成されています。各学年の各教科等の年間授業時数は、学校教育法施行規則に「別表」として示されています。

各教科等における指導計画は、学年ごと、学期ごとに、また単元や題材ごと、1単位時間ごとに作成されます。各教科等の指導計画は狭義のカリキュラムだといえます。それらの総体である教育課程が広義のカリキュラムだと捉えることができます。

一方、マネジメントとは英和辞典

などによると、「経営、管理」などと解説されています。そもそもは企業や会社や団体などで使用される経営用語だったようです。ここから「カリキュラム・マネジメント」とは、カリキュラムを編成・管理・運営していくことだといえます。具体的には、各教科等の指導計画を作成し、有効に実践することによって、優れた教育効果を生み出すことだといえます。

このような意味をもっているカリキュラム・マネジメントが、学習指導要領改訂のポイントとして強調され、令和2年度から重視されています。学習指導要領の総則には、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の向上を図っていく」ことを狙いに、カリキュラム・マネジメントの視点として次の3点が示されています。

- 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと
- 教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと
- 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくこと

なぜ、いまカリキュラム・マネジメントが重視されているのでしょうか。総則に「各学校の教育活動の向上を

図っていく」と示されているように、各教科等の指導をとおして、子どもたちに身につける「資質・能力」と深い関わりがあります。

各教科等の目標として定められている「資質・能力」は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等の能力」「学びに向かう力、人間性等」の3つの要素から構成されています。これらを総合的、一体的に身につけるためには、日ごろからカリキュラム・マネジメントの視点を重視した教育活動や授業を展開する必要があります。

目標のうち、「思考力、判断力、表現力等の能力」や「学びに向かう力、人間性等」といった能力や態度の側面は、各教科等に閉じこもった、閉鎖的な指導では十分に実現されません。これらの資質・能力は教科等に共通性や汎用性があり、超教科的な学力としての性格をもっているからです。また、知識や技能と違って、指導の成果を生み出すまでに時間を要することから、実現の状況を評価する方法も新たに工夫する必要があります。



INFORMATION

2023年度 ばんけい テストのポイント!

✓定着チェック

小単元ごとに定着を確認できるデジタル問題!

自動採点&解説付き。登録や設定は不要!!

ばんけいの選べるテスト!

基礎・基本のAテスト



基礎・基本と活用のNテスト



編集後記

新しい学年が始まり、子どもたちは期待と不安でいっぱいなことでしょう。先生も子どもたちと同じ思いかもしれませんが、どの子も楽しく学校生活を送れるよう、いろいろな工夫をして新学期を迎えていっしょなことと思います。私共も、先生方をサポートする教材を提供できるよう努力して参りますので、よろしく願いいたします。(Y記)

企画・編集：ばんけい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2023年4月1日

さらに、校内に教科等の指導体制を整備するとともに、地域の人々や事象や施設など教育的に価値のあるさまざまな資源を有効に活用することによって、子どもたちに資質・能力を効果的に身につけさせることができるようになります。このことは現在及び将来の社会に開かれた教育課程を編成・実施することにもつながります。

このように、カリキュラム・マネジメントの問題は、一人一人の子どもに各教科等の「資質・能力」を実現させるとともに、最終的には社会を生き抜く力を身につけるための重要な課題であると捉えることが肝要です。

ここでは、カリキュラム・マネジメントの視点のうち、教育の内容を教科等横断的な視点で組み立てていくための方策について具体的に検討します。

なぜ教科等横断的な視点なのか

教科等横断的な視点からカリキュラムをどのようにマネジメントするのかを考えるまえに、教科等横断的な視点なぜ求められるのかについて整理しておきます。

教科の「資質・能力」の実現

まずは、各教科等の指導で求められている当該教科の「資質・能力」を確実に実現させるためです。これらは、例えば、国語科の学力、社会科の学力などといわれる「教科学力」のことです。教科の「資質・能力（学力）」には、その教科ならではのもの（教科固有性）とともに、各教科とのあいだに共通性や関連性があります。

例えば国語科では、読む、書く、聞く、話すといった言語活動に関する知識や技能、能力を身につけます。これらは国語科固有の「資質・能力」といえます。このことを学ぶ教材（題材）は、社会や自然のことを扱った記録文や報告文などが活用されます。これらの内容は社会科や理科などと関連しています。また教材から思考、判断したり、表現したりする能力は国語科だけではなくまれるものではありません。

すなわち、教師は他教科等との関連を図りながら指導することによって、一方、子どもたちは複数の教科等に関連つけて学ぶことによって、当該教科の「資質・能力」を効果的に身につけることができるようになります。

「学校学力」に昇華する

次は、子どもに身につける資質・能力は、各教科等に求められている内容にとどまらないということです。子どもたちが学ぶ教科は、あくまでも科学の論理で、言い換えれば教える立場

から便宜的に設定されたものです。

時間割にはさまざまな教科等を学ぶ時間が示され、教科書も教科ごとに編集されています。しかし、一人一人の子どもの頭のなかでは、各教科ごとの学力がそれぞれ個別に形成されるのではなく、トータルとして、すなわち総合的、全人的に形成されていきます。これこそ、「学校で身につける力（学力）」といえるでしょう。

このことから、子どもたちにトータルとしての学力をどうつけるかという視点が重要になります。高等学校や大学など上級学校に進むにつれて、学力の中身は専門性が高まり、さらに分化し深化していく傾向があります。それに対して、小学校や中学校といった義務教育の場は、学校教育の標準性や共通性を担保するという性格が強くと、どの子どもにも基礎学力とか基礎・基本といわれる、共通的な「資質・能力」の実現を保障する必要があります。

このように、「教科学力」を「学校学力」（最終的な学力）に昇華させ、やがて社会を「生きぬく力」にまではぐくむことが重要です。そのために必要になる手だてが「教科等横断的な視点」だといえます。

学びのネットワークキング

学習指導要領総則には、「指導計画の作成等に当たっての配慮事項」として「各教科等及び各学年相互間の関連を図り、系統的、発展的な指導ができるようにすること」が示されており、これらの記述内容も踏まえる必要があります。各教科等の相互の関連を図るとは、時間軸（縦断的な視点）と空間軸（横断的な視点）の二つの軸で捉えることです。

また、A教科からB教科へとといった一方向性の関連だけではなく、またA教科とB教科の双方向の関連だけでもなく、複数の教科等が相互に関連し合うことが重要です。これは、教師がネットワークキングを意識して指導することです。これによって子どもたちは学びのネットワークキングを發揮しながら学ぶようになります。

例えば、「前の時間に勉強した○○○のことに結びつけて、□□□だと考えました」、「（社会科の時間に）国語の時間に学んだ『キーワード』の探し方を使って、文章資料を読み取りました」、「算数の時間にできなかった問題があったので、これを今日の『私の宿題』にします」など、子どもたちから、他の教科や学習場面を意識した発言が出されることを期待したいものです。これらは、子ども自身が他教科等の学習と関連付け、横断的に

学んでいる姿だといえるからです。

教科横断的な教育課題への対応

教科横断的な視点が求められるいま一つの理由は、教科横断的な教育課題への対応です。従来から、学校教育には、環境問題をはじめ、消費者問題、安全や防災、伝統・文化、食、エネルギーなどの教育課題が提起されてきました。これらの課題を取り上げる特定の時間枠はなく、関連する教科を中心に全教育活動とおして実践するとされてきました。このことは、意図的に取り上げないと、結果として実践されないことを意味しています。

こうした教育課題を意図的、計画的に実施できるようにするには、複数教科で取り上げられる教育課題を相互に関連付けます。当該の教科においては「○○教育の視点」として関連性を明確にします。これにより、その教科において教育課題に関心をもたせ、理解を深めさせることができます。

このように、さまざまな意味合いから「教科等横断的な視点」でカリキュラムを作成することの必要性を捉えておきたいものです。

当該教科における縦断的な指導

当該教科の「資質・能力」を実現するために、まずその教科においていかに縦断的な指導を充実させるかについて考えます。ここでいう縦断的とは、前述したように時間軸の視点です。当該教科における指導（学習）の系統性や発展性を意味しています。このことを意識することで、当該の教科において、子どもの学びや教師の指導の深まりを期待することができます。

ここでは、単元・題材、年間、小学校といった時間の幅で考えます。

単元・題材指導計画の構想力

まずは、単元・題材をいかにマネジメントするかという問題です。授業は基本的に45分という1単位時間ごと展開されます。これが授業の最小単位です。単元や題材を「森」にたとえると、1単位時間は森を構成している1本1本の「木」にあたります。それは単独に成立するものではなく、数時間から10数時間で展開される単元や題材の指導計画に位置づいています。

1単位時間の指導だけに目がいきがちですが、「木を見て森を見ず」にならないように、授業者には単元・題材の指導計画を対象に授業を構想することが求められます。具体的には、その教科の特質を踏まえて、問題解決的な学習の指導計画をマネジメントすることです。指導の見とおしをもっ

て、1単位時間のあいだに学習の必然性と発展性をいかにもたせるか。授業者の指導計画の構想力が問われます。

年間の単元（題材）構成力

子どもたちは年間のなかで、いくつかの単元や題材の学習をとおして学びを深めていきます。そこでは、複数の単元や題材がばらばらに存在しているのではなく、学習内容や教材の関連性や系統性、発展性が求められます。これが「深い学び」につながります。

教科書の「目次」に相当する、「第1単元」「第2単元」「第3単元」などの単元構成は一定の意図や狙いをもって配列する必要があります。

このことから必要になるカリキュラム・マネジメントは、現時点の学習をこれまでの学習（内容や教材、題材など）といかに関連付けるか。また、これからの学習にどう発展させていくかということです。各学年において、過去・現在・将来の観点から単元（題材）間の関連性、発展性をいかに図りながら、年間の単元を構成するかということです。1年間という時間軸で単元を構成する力が必要になります。

学習指導要領に示されている各学年の「内容」は、特別に指示されている場合を除いて、学習の順序を示しているものではありません。教科によっては、学習指導要領に示されている順に単元や題材を機械的に構成し指導されていますが、学習や教材の適時性や子どもたちの興味・関心等を踏まえて、単元を一部入れ替えるなど学習の順序を再検討する必要もあります。

さらに、5、6年については中学校での学習との関連性についても把握しておくといでしょう。

小学校における指導計画

縦断的な視点からカリキュラム・マネジメントを考えるいま一つのポイントは、当該の教科等において小学校教育全体を視野に入れることです。

具体的には、当該教科等において、これまでの学年でどのようなことを学んできたか。これからの学年でどのような学習が予定されているかということに配慮して指導計画を作成することです。6年間（教科によっては、4年間や2年間）を視野に入れ、その教科の学習が進展し、深まっていくように各学年の単元を構成します。

こうした視点から教科の学習の充実を図るとき、次のような課題があります。一つは、前学年までの学習内容をどの程度実現しているか、子どもの学習状況の実態を把握（評価）することです。指導内容の系統性の強い教科においては、学びなおし（再指導）

が必要な場合もあります。

いま一つは、学年が進級するごとに学級担任が変わることがあります。生徒指導と比べて、学習面の指導体制が不十分ではないかという指摘もあります。校内の指導体制を整え、指導や子どもについての情報を共有する仕組みをつくることが重要になります。各教科の学習指導体制を校内で検証し整備する機会を設けたいものです。

教科等横断的なカリキュラム

これまで述べてきた当該教科における縦断的な視点は、時間軸によるカリキュラム・マネジメントでした。それに対して、複数の教科等の横断的な視点があります。これは空間軸によるカリキュラム・マネジメントです。教科等横断的なカリキュラム（指導計画）を作成することで、子どもの学びと教師の指導にこれまで以上に深まりと広がりを目指すことができます。

ここでは、学習内容・教材と学習方法（学び方）の二つの視点から、教科横断的なカリキュラムのあり方について考えます。

教科横断的な教育課題

複数の教科等を横断的に関連付けながら指導するとき、学習内容や教材の共通性に目をつけることができます。複数教科に散在している課題に、例えば、安全や防災、環境、伝統・文化、食などの教科横断的な教育課題があります。これらの課題を意図的に取り上げて指導するとき、カリキュラム・マネジメントが求められます。

例えば安全や防災に関連する内容や教材は、学習指導要領に次のような教科等に位置づいています。

- 消防署や警察署の働き（3年）、県内の自然災害（4年）、国内の自然災害（5年）など（社会科）
- 流れる水の働き（5年）、土地のつくり（6年）において、自然災害について触れる。天気、川、土地などの指導で災害に関する基礎的な理解を図るなど（理科）
- 日常生活の問題について、安全の視点から考え、解決に向けて工夫するなど（家庭科）
- 的確な判断の下に安全に行動すること。けがを防止するために、危険の予測や回避の方法を考えるなど（体育科・保健領域）
- 災害等から身を守り安全に行動することなど（学級活動、学校行事）

また、総合的な学習の時間に安全や防災をテーマに掲げ、地域を対象に調べさせ、災害から身を守ること

など安全な生き方について考えさせることもできます。さらに、国語科や道徳科の時間に、安全や防災に関する題材を活用することにより、関心や理解を深めさせることができます。

各教科等における安全や防災に関する学習内容や教材等を相互に関連付けることによって、安全・防災意識を高め、自分の身を守る態度や能力が養われていくものと考えます。

安全や防災のほか、環境、伝統・文化、食などの教育課題についても、複数教科を関連付けた指導計画を作成することにより、これらの指導が一層充実するようになります。また、これは校内で指導のあり方を共有する際の資料になります。

他教科等の学習成果を生かす

教科横断的な指導を行うとき、いま一つは学習方法（学び方）の視点からカリキュラムをマネジメントすることです。小学校においては全教科等を指導することを原則にしていますから、担任は他の教科等の学習内容や教材等に関する情報を知りえています。このことは小学校教師のもっている強みであり、このことを日ごろの指導で生かさず手はありません。

学習方法の視点から教科横断的な指導をするとは、例えば次のようなことが考えられます。

- 社会科や理科の時間に、調べたり実験したりしたことを文章で説明するとき、国語科で学んだ文章の書き方を生かして記述する。
- 社会科や総合的な学習の時間などに調査した結果をグラフに表すとき、算数科で学んだ棒グラフや折れ線グラフの書き方の技能を活用する。
- 算数科で棒グラフの特色や書き方を学ぶとき、体育科の時間に計った走り幅跳びの記録を材料にする。

このように教科等間の関連を図りながら指導（学習）することによって、学びの質が高まっていきます。子どもたちには、学校で学ぶこと、各教科を学ぶことの意義について改めて意識させたいものです。

